



興味溢るる

リナー式番組の競演

文樂人形浄瑠璃

第二回

若手特別興行

生寫朝顔日記

明石舟別より  
宿屋大井川迄

鎌倉三代記

三浦之助母閑居

艶容女舞衣

酒屋の段

双蝶々曲輪日記

引窓の段

御所櫻堀川夜討

辨慶上使の段

九日初日

初日 3時・毎日午後4時開幕

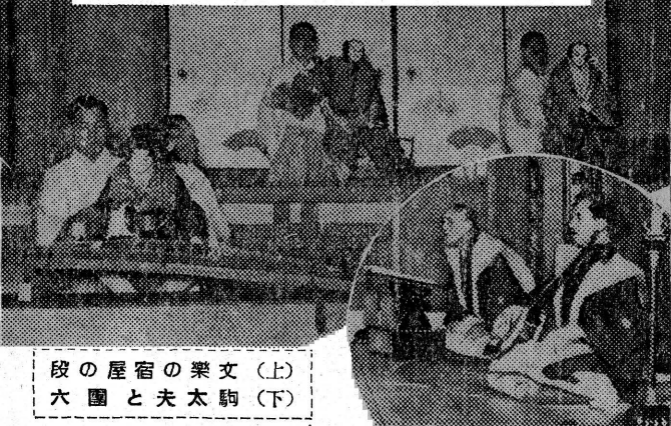
二日十二時まで 二十日限間

|    |     |   |    |   |   |
|----|-----|---|----|---|---|
| 引料 | 初日割 | 料 | 4日 | の | 金 |
| 一  | 二   | 三 | 一  | 二 | 三 |
| 等  | 等   | 等 | 等  | 等 | 等 |
| 子  | 子   | 子 | 子  | 子 | 子 |
| 席  | 席   | 席 | 席  | 席 | 席 |
| 金  | 金   | 金 | 金  | 金 | 金 |
| 一  | 一   | 一 | 一  | 一 | 一 |
| 圓  | 六   | 三 | 二  | 八 | 四 |
| 十  | 十   | 十 | 十  | 十 | 十 |
| 十  | 十   | 十 | 十  | 十 | 十 |
| 十  | 十   | 十 | 十  | 十 | 十 |

前賣切符今夕發賣

文樂座 四ツ橋

# 朝顔 宿屋の段 日記



段の屋宿の樂文 (上)  
六團と夫太駒 (下)

涙にくもる爪しらべ

『増補生寫朝顔話』梗概

秋月弓之助といふ九州邊の國家老の娘深雪が、京都在住中、宇治の螢狩で宮城阿曾次郎といふ美男の若侍と契を結び歡樂の幾日かを過す中に秋月一家は急に本國に引上ぐる事となり、深雪と阿曾次郎は明石の浦で本意ない別れを惜む、その際、深雪は朝顔の唱歌を記した扇を後日のかたみに阿曾次郎の船に投入れて機を解いた

▽……其後阿曾次郎は仕官し駒澤次郎左衛門と改めて江戸へ出立する、一方歸國した深雪は男の事を忘れかね本國を出奔して都へ上ると男は去つたので、その行方を追ふ中、盲目となる、駒澤となつた阿曾次郎は同役の岩代と共に東海道を下り、鳥田宿の戒屋で偶然盲目姿の深雪に邂逅したが、それと明さず出立する

▽……後でしつた深雪は直ぐと其後を追つたが一足違ひで大井川は豪雨で川止となつたので、失望の結果入水して果てようとした時、戒屋の亭主と下部關助が駆けつけて助け、戒屋の亭主は深雪が祖父の家臣といふ事が解り、駒澤が患んだ眼薬は甲子生れの人間の生血で調劑すれば癒えるといふので、甲子生れの亭主が切腹してそれが爲めに深雪の眼が開くといふ物語である

▽……今晚は朝顔(深雪)の出へむさんなるかな秋月の……から段切、大井川まで語る、な

後 淨るり 豊竹駒太夫

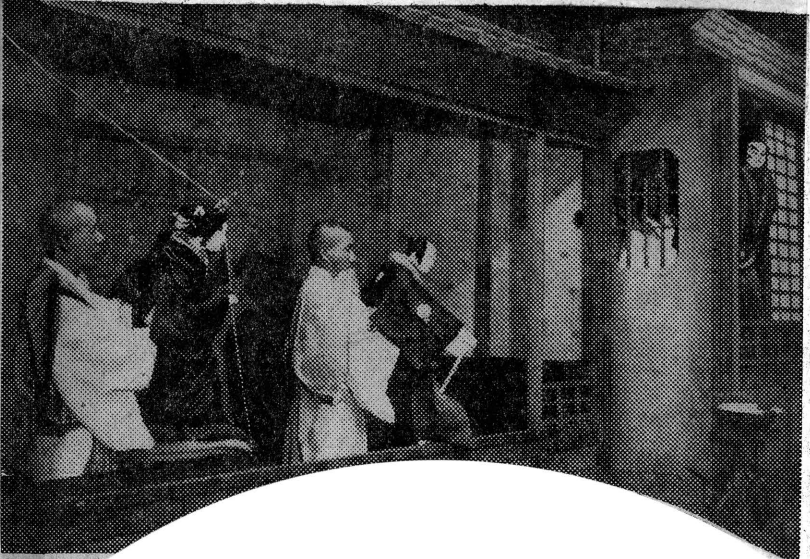
ほこの淨るりは普通「朝顔日記」と呼ばれてあるが本名題を「増補生寫朝顔話」といひ原作の「生寫朝顔日記」を脚色したものである

〇四・八 三味線 竹澤團六

琴 鶴澤友駒



大井川の深雪……文楽



◇◇義太夫◇◇

双蝶々ふたつちやう曲輪日記くわだじ

引窓の段

(夜八時  
四十分)

浄るり 竹本相生太夫  
三味線 鶴澤清二郎

あきら筋

人殺しをしてお尋ね者となつた相撲取の濡髪の長五郎は、せめて一目、母親の顔を見た上で自決したいと、大阪から八幡村へ落ちて、人知れず生みの母お幸の家へかくまはれてゐる、かくとは知らぬこの家の主——お幸の義理の子南與兵衛は、新に名字帯刀を許され親の名十次兵衛を襲名、庄屋に取立てられた上、手柄初めに罪人召捕りの手引きを仰せつかつて大喜びで我家へ歸つて来たが召捕らうとする罪人は、長五郎であることを知り、母の心、女房の義理も察して長五郎を救はうと決心し、それとなく逃げ道まで教へて家を出て行く、長五郎はみんなの温情に絶體絶命、潔く與兵衛の纏にかゝらうと覺悟して家を飛び出さうとしたが、母と與兵衛の女房お早に意見され姿を變へるために前髪を剃り落し、與兵衛が投げた情けの手裏剣に高頬のほくろも消して河内へ落ちて行く

# 義太夫

「双蝶々曲輪日記」は近松門左衛門作の「壽の門松」と西澤一風、田中千柳合作の「昔米万石通」を併せて脚色した物語で、竹田出雲、三好松洛、並木千柳の合作である、初演は寛延二年七月の竹本座であった「引窓」はその八冊目に當り「角力場」とともに歌舞伎にも残り、鴈治郎などによつてしばしば上演されてゐるが、淨るりとしてはあまり有名でない、最近で文樂座の手摺にかゝつたのは去る九月の第二回文樂若手特別興行で、今夜と同じ相生太夫、清二郎によつて語られ好評を博した



この淨るりは地合が少ないので音曲的には香ばしいところは少ないが、母お幸のわが子に對する激しい愛着、義理の母に對する南與兵衛と女房お早の義理立の温情、それらに取圍まれた洗髮長五郎の苦衷がまんじ巴と入り亂れて、義理と人情の柵みにあへぐ人の世のすがたを巧みに描いた名作だけに、語るもの弾く人、自ら十分の用意を必要とする、母が手づから長五郎の前髪を剃落すくんだりを中心に、最後の母子生別の場面が聴きどころである、なほへ河内へ越ゆる拔道は……と、與兵衛

がそれとなく逃道を教へるくたたりは聲色によく用ひられる



“段の使上慶弁”るみに樂文

# 文樂史に時代劃して

## 「紋下」は解消の運命へ

### 津太夫と古靱太夫の纏れは水に流れ

### けふは暗雲ぬぐふ會見

江戶の末期、近松の人情が一世を風靡したころ大阪に繰舞と喚き誇つた人形浄瑠璃のもつ藝術と榮華と權勢を、一身に集めた紋下が、つひに時代の潮流に抗し得ず、わづかに人形浄瑠璃の傳説と宿命を傳へて残る「文樂座」から消れて行き、或はこれを契機として人形浄瑠璃史上からも永久に消滅するのではないかと見られる事態に立いたつた――

今春二月大阪文樂座の「紋下」津太夫と、自他ともに次の「紋下」を許した古靱太夫との間に「紋下」の紛糾を、むる紛糾が持ち上り古靱太夫、津太夫との同座を拒絶したと、従つて傳説の殻中に相違ひがみ合ひはいつ果つべしともなくつゞけられ、藝術を愛する

心ある 一部の人達のひんしゆくを買つてゐたが、白井松竹社長、多田常務、福井常

務はこの藝術を毒する不祥事を非常に遺憾とし、津、古靱はもとより、文樂座に牢固たる勢力を持つ土佐太夫、三味線友次郎らの間を種々斡旋調停につとめた結果、最近津、古靱の兩氏は白井氏の懇誠を容れて白紙一任と折れたので、土佐、友次郎らを加へた文樂の首腦者らは、白井松竹社長の九州旅行から歸るのを待つて、十二日午後南區富屋町三六の白井氏邸に集

まり、一切の行がりを水に流して 十月から八ヶ月ぶりに津、古靱の兩氏纏が仲よく文樂の舞台に出でフアンを喜はせることになつた、そしてこの機會に津太夫はサツパリ紋下を辭し久しく紛糾の波に弄ばれた「紋下」は、一時白井松竹社長の手元に預られることになつたが、同氏の意向では――現在の紋下には、すでに江戸時代人形浄瑠

璃花やかなりしころの實權はなく有名無實の虚位となり下つてゐるにも拘らず、わづらはしい紛糾が將來も同じように繰返されることは至極の將來に暗影を投ずるものであるから、再び「紋下」が白井氏の手元から離かに渡されることなく、事實上人形浄瑠璃史から消れて行く運命をもつのではないかと見られてゐる

「虚位を」めぐつて 將來も同じように繰返されることは至極の將來に暗影を投ずるものであるから、再び「紋下」が白井氏の手元から離かに渡されることなく、事實上人形浄瑠璃史から消れて行く運命をもつのではないかと見られてゐる

### 新統制に期待

#### 福井松竹常務談

「紋下」は文樂座全座員の推薦によつて藝も人格も最も立派な人がならね

ばならぬ、今のように年齢順とか先聲順によつて定められるのは不徳當です、若いものでも人形浄瑠璃を背負つて立つだけの藝が出来、人格が立派ならば「紋下」になればよいと私は思つてゐる、それが出来なければ紋下なんか出来ない方が却つてよろしい、津太夫が「紋下」を辭したあと後継者は恐らく實現せず、文樂は津、古靱、土佐の三頭制によつてうまく統制をとつて行くでせう、さうなればお互にいそな感情を超越して團み合ひ却つてよい結果を見るだらうと期待してゐます

### 虚位を守る

#### 必要はない

#### 某消息通曰く

「紋下」は義太夫藝術の最高位を表象する極めて至純なものでなければならぬにも拘らず津太夫はこれを古靱に譲るを懸念して日約し古靱はまた津が口約に背いて紋下を譲らぬと憤慨するなど全く「紋下」の何たるかを解しないものだ、現在の如く「紋下」が全然言のおもかけを失つた以上何を

苦しんで虚位を守る必要があらう、新しい酒は新しい革囊に盛らねばならぬ、文樂座もこの際斷然「紋下」を廢し新時代に適する體裁なり組織なりを作つた方が却て聲明かも知れぬ